

令和8年度 学校「学ぶ力」育成プログラム

自分のよさを生かし、高め合う子の育成

学校番号：22011

「学ぶ力」	
実態	成果
	<p>◇学校研究の重点「自分のよさを生かし、高め合う子の育成」の実現に向けた継続的な取組を通して、自己肯定感・自己有用感の高まりが見られ、将来への目標や夢をもって学校生活に前向きに取り組む児童が増えてきている。</p> <p>◇光陽スタンダードを「話す・聞く」に焦点化し「たいせつ」を合言葉として全校共有・継続してきたことで、学習場面において安心して自分の考えを表現したり、友達の話に丁寧に耳を傾けたりしようとする姿勢が醸成されてきた。</p>
	<p>◇〈国語〉 どの学年においても「書く」分野の正答率が低い傾向にある。点ではなく線として、年間を通じた繰り返し・継続的な指導が必要である。</p> <p>◇〈算数〉 基礎基本が定着していない児童が見られる。また、どの学年においても「図形」分野の正答率が低い傾向にある。こちらも年間を通じた継続的な指導の充実が求められる。</p>
「学ぶ力」の基盤〈協働を通して磨く 相互承認の感度〉の現状と課題	
	<p>◇子どもたちは光陽スタンダード「たいせつ」を土台に、自分の考えを表現したり友達の話を丁寧に聞いたりする姿が育ちつつある。しかし、友達の考えの違いを価値として受け止め、互いの見方・考え方を生かして学びを深め合う姿にはまだ個人差が大きい。どの子も見方・考え方を働かせられる状態をつくる教材化と、思考の動きを支える教師の関わりを充実させることを通して、違いを認め合い互いを高め合う関係性を日常的に育む授業づくりが必要である。</p>

「学ぶ力」の育成のために着目する資質・能力

「自ら学ぶ方法」と「人と学び合う方法」を身に付け、実践する力

取組	課題探究的な学習の推進 に向けて	自主的な活動の充実 に向けて
		<p>①「どの子も見方・考え方を働かせる力を育む教材化」の追求</p> <ul style="list-style-type: none"> 多様な子どもが参加しやすい導入・場面設定の工夫 経験と新しい学びを結びつけ、比較・関連付けが自然に起きる問いの構造 認知負荷を調整し、迷う子にも手がかりが残るステップの設定 光陽スタンダード「たいせつ」を学びに意図的に生かす手立て <p>②「どの子も見方・考え方を働かせる力を育む教師の関わり」の追求</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもの思考の動きを丁寧に見取り、問い返し・焦点化・揺さぶりによる思考の促進 発言の順序や扱い方を工夫し、対話の流れをつくる 見方・考え方が働く瞬間を逃さず価値付ける 学年共同研究を通じた教材化と関わりの一體的な磨き上げ
「学ぶ力」の育成の一層の充実を図る ICTの活用について		
	<p>◇3年生以上のクロームブックの日常的な持ち帰りにより、学びを家庭と学校でつなげる環境を整えている。情報モラルウィークの設定を通して、情報を正しく安全に活用する力を育む。また、タイピング力の向上を図るためのオンラインツールを継続的に活用し、端末を学びの道具として使いこなす基礎技能を高めている。クラブ・委員会活動においては、クラスルームを年度をまたいで活用し、活動記録・振り返り・引き継ぎ事項を蓄積・共有することで、児童主体の継続的な活動づくりを支えている。</p>	

<本プログラムの実行に向けて>

